

本日の箇所はお分かりのように先週の長血を患った女性が癒されるという話の前後に出てくる話です。言わば先週の話が今日の話の中にサンドウィッチのように入っているのです。マルコの福音書にはよくこういう語り方が出てきます。大体の理解としては、この二つの話が内容において密接に結びついているから、両者を一つの話として読んでほしい、という著者マルコのサインだと言われています。どちらも重要だということですね。そのことを少し意識していただきながら一人の少女が主イエスによって生き返るという奇跡が起こったことを見てゆきたいと思います。

その少女とは名前はでていませんが会堂管理者ヤイロの娘でした。会堂というのは、当時のユダヤ人たちの礼拝の場所であり、同時に学校や集会所でもあった、シナゴグと呼ばれる場所であり、彼はその管理者だったのです。会堂管理者とはいわゆるラビ、律法の教師ではありませんが、人々から信頼され尊敬されていた信仰者であったのです。そのヤイロが、ガリラヤ湖のほとりにおられた主イエスのもとにやって来て、その足もとにひれ伏したのです。そして23節にあるように、「私の小さい娘が死にかけています。どうか、おいでくださって、娘の上に御手を置いてやってください。娘が直って、助かるようにしてください。」と「いっしょうけんめい願ってこう言った」のです。主イエスの周りには大勢の人の群れが集まっていたと21節にあります。その多くの群衆の目の前で、主イエスの足もとにひれ伏してこのように願うというのは、地位も名誉もある彼にとっては大変な勇気のいることだったのではないのでしょうか。しかし彼は、もはや恥や外聞にこだわってはおれない、切羽詰まった状況にあったのです。十二歳になっていた最愛の娘が死にかけていたのです。勿論これまでに、いろいろと手を尽くして娘の病気を治そうとしてきたでしょう。しかしもう万策尽きてしまったのです。恐ろしい死の力が愛する娘を、そして彼の家庭を飲み込もうとしており、その力の前で自分が全く無力であることを思い知らされているのです。そういう苦しみ、絶望の中で彼は、主イエスの足もとにひれ伏したのです。おそらく彼は主イエスに今日初めて会ったわけではありません。主イエスがガリラヤでの活動の拠点としておられたのはカペナウムの町であり、彼はこの会堂管理者の一人だったのです。ですから彼が管理している会堂で主イエスが説教してきたのを彼は聞いていたのでしょう。しかし今まで彼は、主イエスの足もとにひれ伏すことはありませんでした。それは彼が会堂管理者という社会的にも宗教的にも一目置かれる立場に立つ者として生きていたことと関係しています。ユダヤ人社会の重鎮であり、信仰的にも指導者である、そういう自負、自尊心を彼は持っており、これまではその自分の立場から、主イエスの教えやみ業について、いいとか悪いとか判断していたのではないのでしょうか。つまり彼は主イエスとはある距離を保ちつつ、その教えやみ業を評価していたのです。想像するに、主イエスがこの会堂で多くの群衆に話をされるのを腕組みしながら聞いていたのではないのでしょうか。そしてイエスの教えを聞き、み業を見て、この教えは納得できるとか、いやこれはおかしいとか、この業は不思議だなどとつぶやいていたのではないのでしょうか？そういう思いや姿勢は今この礼拝に集っている私たちの中にもあります。私たちはそれぞれ、自分がこれまでに得てきた知識や体験に基づいてある世界観、人生観あるいは信念を持っています。自分なりに生きてきたというささやかなプライドもあります。私たちはそういう自分の思いを基準にして、教会の教え、聖書の教えを評価し、なるほどと思ったり、それはちょっと納得できないと思ったり、そんなバカなことが、と思ったりしているのです。自分に起こしてくださる神のみわざを、主イエスとはある距離を保ちつつ、判定しようとしているのです。ヤイロもこれまではまさにそのように主イエスのことを外から、ある距離をもって眺めていました。しかし今、娘が死にかけているという人生の危機に直面して、自分の力ではどうすることもできない恐ろしい死の力に脅かされる中で、彼は主イエスの足もとにひれ伏して救いを求めたのです。地位も名誉もかなぐり捨てて、主イエスに「助けてください」とすがったのです。

主イエス・キリストは、距離を置いて外から評価、判定しようとしている者に対しては何もお語りになりません。しかしみ前にひれ伏して救いを求める者の願いには応えて下さるのです。24節に「そこで、イエスは彼といっしょに出かけられた」とあるのはそのことを示しています。苦しみの中で、すべてをなげうって救いを求めて来た人の思いを、主イエスはしっかりと受け止めて下さるのです。しかし彼らがヤイロの家へと急いでいる途中でハプニングが起きました。それが先週学んだ病気で苦しんでいた一人の女性が、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れて、癒されたという話です。ヤイロに対してもこの女性に対しても、主イエスは同じように、深い苦しみの中から救いを求める思いを受け止め、それに応えて下さっています。どちらが重大かという問題ではありません。なりふりかまわずただ主イエスの憐みを求めて来る人に対して主は答えてくださるのです。

さて思わぬハプニングによって足留めをくらっている間に、ヤイロの家から使いの者が来ました。そして、「あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生を煩わすことがありましょう。」と告げたのです。娘は死んでしまった。もう取り戻すことはできない。それはヤイロが最も恐れていたことでした。「このうえ先生を煩わすことがありましょう。」この言葉は深い絶望と諦めを語っています。藁にもすがる思いでイエスの救いを求めたけれども間に合わなかった。残念だけれども、これから先のことは主イエスに無理難題を押し付けては困らせるのはどうなんでしょう？そのような意味の言葉をヤイロは聞いたのです。ところが36節、「イエスは、その話のことばをそばで聞いて、会堂管理者に言われた。『恐れないで、ただ信じていなさい。』」「そばで聞いて」とありますが、ここは以前の口語訳聖書では「聞き流して」と訳されています。「無視して」と訳しているものもあります。つまり主イエスは娘は死んだという絶望の知らせを聞き流し、無視したのです。私たちもそういうことをすることがあります。ただ私たちの場合は余りにも悪い知らせ、つらい出来事を聞かされると、それに耳を塞ぎ、「そんな話は聞きたくない」という仕方でも自分を守ろうとします。しかし主イエスの場合は違います。「お嬢さんは亡くなりました」という知らせをちゃんと聞いた上で、それに動ずることなく、「恐れないで、ただ信じていなさい」とおっしゃったのです。見て見ぬふりをするのではなく、しっかりと見ながら、そこに立ち止まる必要はないと言われたのです。恐れは、悪い感情ではありませんが嫌な感情です。恐れ、不安のあまり、人をそれを取り除こうと思っいろいろなことをやりだします。特に物事を突き詰めて考えるタイプの人は何故？なぜならばと際限なく考えます。そして往々にしえ行き詰ってしまいます。主イエスは「恐れないで、ただ信じていなさい」と言われました。「ただ信じる」シンプルなことですがこれはなかなか難しいことです。しかし、主は「ただ私を信じるように」とおっしゃったのです。

彼らがヤイロの家に着くと、「人々が、取り乱し、大声で泣いたり、わめいたりして」いました。そこには、死の力の支配の前で、泣くことしかできない人間の無力さが現れています。勿論、泣くこと、涙を流すことは、悲しみの中にいる者に慰めをも与えてくれます。泣くことができるのはすばらしいことです。また人のために涙を流すことは貴いことです。人間が心から流す涙を神様は決して疎かにはなさいません。しかし、主イエスは私たちのために泣いて下さっただけではないのです。私たちは死の力の支配の下ではただ泣くことしかできませんが、主イエスは、私たちをその支配から解放して下さいます。

そのことがここに示されていきます。主イエスは家の中に入り、人々に「なぜ取り乱して、泣くのですか。子どもは死んだのではない。眠っているのです。」39節と言われました。これは、本当は死んでいない、死んだように見えるけれども眠っているだけだ、ということではありません。ヤイロの娘は、本当に死んだのです。だから人々は主イエスを40節「あざ笑った」のです。子供が本当に死んでしまったことを彼らは知っていたからです。では主イエスはなぜ、「眠っているのだ」とおっしゃったのでしょうか。死んだ者を「眠っている」と表現するのは、そこに眠りから目覚める、つまり復活することが予想されて

います。ですから「子供は死んだのではない。眠っているのです」という主イエスのお言葉は、「この子を私が復活させる、目覚めさせる」ということなのです。そして主イエスはそのお言葉を実行なさいます。子供のいる部屋に入り、その手を取って、「タリタ、クミ」と言われたのです。それは「少女よ。あなたに言う。起きなさい」という意味でした。まさに眠っている少女を起こすように、主イエスは彼女をお呼びになったのです。すると少女は、深い眠りから爽快に目覚めたかのように、すぐに起き上がって歩き出したのです。

この驚くべきみ業において特徴的なことは、主イエスが、この少女が死んだという事実を、最初から最後まで認めておられない、ということです。「お嬢さんは亡くなりました」という知らせを主イエスは「聞き流し、無視して」、「恐れるな、ただ信じなさい」とおっしゃり、また「子供は眠っているだけだ」とおっしゃり、そして少女に「起きなさい」と呼びかけたのです。それは少女の死という現実を目を塞いで、無視しているではありません。主イエスは、死の圧倒的な力の前で恐れおののき、恥も外聞も棄ててひれ伏して救いを求めた一人の父親の思いに応じて歩み出して下さったのです。主イエスは、真剣に救いを求めて来る者の願いに応じて、死の支配からの解放を与えるためにその人と共に歩み出して下さるのです。主イエスはそこで、「恐れることはない、ただ信じなさい」とおっしゃいます。何を信じなさいとおっしゃるのか。それは、主イエスがひとたび共に歩み出して下さっているなら、死の力が私たちを支配することはもはやないのだということをです。主イエスが死の力を打ち破り、その絶望から私たちを救い出して下さるのだということをです。主イエスのこの恵みの力の前では、肉体の死も、眠っているのと同じであり、目覚める時が与えられるのだということをです。そのことを信じなさいと主イエスは言うておられるのです。そして「信じなさい」とおっしゃるだけでなく、その救いを体験させて下さるのです。

この少女の復活の出来事は、主イエスの十字架の死と復活とによって実現した救いを指し示しています。主イエスは十字架にかかって死んで下さることによって、私たちを脅かしている死をご自分の身に引き受けて下さり、私たちの身代わりとなって死んで下さったのです。そして父なる神様は死の力を打ち破って主イエスを復活させて下さいました。主イエスの十字架の死と復活とにおいて、神様の恵みが死の力に勝利し、私たちをその支配から解放して下さいました。私たちは夜、眠りについて、朝、目覚めます。そのようにいつか長い眠りについて、目を覚ますと目の前にイエス様がおられ、先に召された兄弟姉妹がそこにいます。私たちは誰もがいつか必ず死んで眠りにつきます。しかしその死は、もはや私たちを最終的に支配する力ではないのです。

私たちのこの世における歩み、人生には、自分ではどうすることもできない苦しみ悲しみ困難があります。ヤイロが味わった苦しみ、絶望を私たちも覚えるのです。そのヤイロは主イエスの足もとにひれ伏して救いを願いました。私たちにも、そういう機会が与えられています。それがこの主の日の礼拝です。礼拝において私たちは、主イエスから距離を置いて、その教えやみ業を自分の思いによって判定したり、評価しているようなこともあります。しかし深い苦しみ悲しみの中で、主イエスの足もとにひれ伏して真剣に救いを求めることも、この礼拝の中でこそできるのです。その時主イエスは私たちの願いに応じて、共に歩み出して下さいます。十字架と復活の主イエスが、この礼拝において私たちに出会って下さり、「恐れることはない。ただ信じなさい」、「あなたを脅かしている死は、私の恵みの前では眠りに過ぎない」と語りかけ、私たちの手を取って、「わたしはあなたに言う。死の恐れの中から起き上がりなさい」と告げて下さっているのです。